（報告概要）資本主義の成熟と「転換」―わたしたちはいまどこにいるのか

小西一雄（立教大学・名）

はじめに

序：歴史としての資本主義

１．成熟段階にある日本資本主義

２．分裂するアメリカ資本主義

３．資本主義の行き詰まりとしての「金融化」現象

４．資本主義のフロンティアとしての「デジタル化」とその限界

５．未来社会の足音

おわりに；「社会革命」の現段階

資本主義はいまどこにいるのか、そしてどこへ行くのか、本報告ではマルクスを手掛かりとしてこの問題を考えてみたい。そしてこのことを通じて、未来社会を可視化することの重要性を提起してみたい。

このような視点からみると、現在の日本資本主義は生産力の発展という歴史的使命を終えた成熟段階にある。

アメリカは国際通貨国、債務大国、移民大国、加えて軍事大国という条件によって生産力発展の余地を残しているが、所得格差・資産格差の拡大という形でアメリカ社会の分裂を生み出しつつある。

こうした歴史的段階にあって、アメリカを中心に「金融化」と「デジタル化」が相携えて進んできた。しかし、両者が資本主義に与えるインパクトには違いがある。「金融化」は資本主義の行き詰まりの表現であってそこに未来はない。対して「デジタル化」は当面のところ資本主義のフロンティアである。今後「デジタル化」に突き付けられてくる問題は「デジタル化」の資本主義的利用の限界の問題であり、さらに「デジタル化」は未来社会の物質的土台のひとつを提供する可能性を秘めている。

先進資本主義国が生産力の発展という資本主義の歴史的使命が終わりをむかえつつある中で、「デジタル化」を別としても、未来社会につながる物質的諸条件も成長してきた。それらは利潤原理を、したがってまた市場原理を相対化する動きであり、そのことを通じて労働の在り方を変える動きの広がりである。

しかし、資本主義のもとでの生産力発展が難しくなり、かつ未来社会へのさまざまな萌芽が広がりつつあるということと、それを人々がどのように意識するかは別問題である。社会の広範囲で日々再生産されている成長信仰、市場信仰、競争信仰、そして自己責任論のイデオロギーは強靭である。なぜならば、それらはまさしく資本主義に適合的なイデオロギーだからである。しかし、一方でそのようなイデオロギーとは相容れない課題も人々の意識にのぼっている。たとえば、①標準労働日を働けば健康で文化的な生活が送れる社会の実現。②一定年齢まで働けば、老後は年金で安心してくらせる社会の実現。③そのような労働が困難なハンディーキャップを持つ人々には、無条件で健康で文化的な生活を保障する社会の実現。これらは未来社会の入り口ともいうべき課題でもあり、およそ新自由主義とは相容れない課題である。しかし、今日では、自民党といえどもこうした課題を否定できないであろう。現在はそのような社会意識が広がっていく時代でもある。しかし、これらの改革の課題を正反対のスローガンに転化するキーワードがある。「経済成長」「強い経済」の実現である。先にみたような改良の課題は一応是認したうえで、しかしそのためには財源が必要であり、強い経済、経済成長が必要であるというレトリックである。いったんこれを受け入れると、先の改良の課題は骨抜きにされて、「企業が儲けやすい社会の実現」という真逆の課題に転換することになる。この「成長信仰」は、安倍政権のみならず、右から左までひろく社会に広がっている。しかし、先の三つの課題にしめされたような社会を実現する生産力の基礎はすでに十分に日本資本主義に備わっている。問題はこのような事実をいかに可視化していくかである。